
変態ホイホイ

ランプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態ホイホイ

【Zコード】

Z6648V

【作者名】

ランプ

【あらすじ】

木崎光^{きさきみつ}16歳。神様の暇つぶしで異世界にトリップしました。そ
してトリップ特典として変態に好かれるといういらん最悪な能力を
いただきました。さて私はどうすればいいんでしょ?……?

改めシリーズと繋がりがあります。一応これだけでも読めると思
いますが、改めシリーズ『勇者のオマケ改め……』も時間があれば
どうぞお読みください。

(前書き)

タイトル通り変態が出てきます。また別作品『勇者のオマケ改め…』に繋がる設定などがあります。

変態につかまりました。

あ、間違えた。変態をつかまえました。

え？ お手柄？ 表彰モノ？ 一日署長？ いえいえ違います。

そういう意味の「つかまえた」じゃないんです。

まずは自己紹介から始めましょう。

私の名前は木崎光^{きさきみつ}。家族構成は両親に双子の姉と兄。そして末っ子に私。花も恥らう16歳。

大雑把が人型になつたような両親と、男らしさを奪われ代わりにヘタレを手に入れた兄にたような姉と、男らしさを奪われ代わりにヘタレを手に入れた兄に囲まれ生活していました。

その微妙に奪い奪われな関係の双子の姉と兄ですが、つい最近行方不明になりました。でも、両親はこれといって慌てません。木崎家ではよくある事です。

木崎家は変人……まあ、変わり者が多い事で近所でも有名です。そして、神隠しにあいまくる家系としても有名です。

これが都会だつたりしたらかなりの大問題やら大事件やらになるんでしようが、ド田舎ド辺境なこの土地では最早風物詩に近いものとして捉えられています。

それってどうなんでしょうね……と疑問を感じずにはいられません。

ん。

この間家族で散歩していく近所のおばあちゃんに道端で会つた時なんて「もし光ちゃんが神隠しにあつたら木崎家の血筋は途絶えちゃうねえ」とノホホンとした口調で言されました。

笑い事じやないですよおばあちゃん。

それに対しても父が言つた一言。

「一発頑張つてみるかあ」

何を頑張るつて言'うんですかお父さん。いや、言わなくていい言
わなくていい。むしろ言'つな。

その言葉に対してもが言つた一言。

「途絶えちゃうのは困るものねえ」

おい。おい、私が神隠しにあうの前提に話を進めるな。

私は木崎家において唯一と言つていいほど普通で常識的だ。神隠
しにあう人は往々にして変人……変わり者だから私は神隠しになど
絶対にあわない！

そんなふうに考えていた時期が、私にもありました……。

木崎光16歳……固い決意虚しく……この度神隠しにあいました。

* * * * *

さて、私達が神隠しだとか、近代的に行方不明とか言つていたの
はなんと、異世界トリップだつたという事がこの度発覚いたしました
た。

何故発覚したかと言つと……私自身がトリップしてしまったから
ですよチクシヨウ……。

「私は神だ」

日差しが嫌になるほど降り注ぐ田舎道に、ソイツはイキナリ現れ
ました。

この糞暑い真夏の日差しの中、ソイツは厚手の袖の長い、ファン
タジー的な服装をしていました。白を基調としたそれは、神官を思
い起させました。ヒヨロッとした弱そつ……優げな雰囲気がより
一層その印象を深めます。そしてその見るからに不審者な存在は、

私に対し開口一番先ほどの台詞を吐きやがったのです。

私はその瞬間、頭の中で選択を迫られました。

1、今すぐ背中を向けて走って逃げる。

2、目を逸らさぬようしながら徐々に後ろに下がり、十分に距離稼いでから逃げる。

3、とりあえず話を聞き、穩便に別れを告げる。

4、今すぐ悲鳴をあげて助けを呼ぶ。

まず4は却下。こんな田舎道、人なんていません。それが田舎と言ふ物です。

次に2。熊などの猛獸に遭遇してしまった時の対処法に近いですが、目の前の存在を猛獸と同じ括りにしていいのか悩みます。なので却下。

次に3。日本的な平和的解決方法です。とても惹かれます。しかし、目の前にいるのはどこをどう見ても日本人じゃありません。と言うか、アジア人ですらありません。緑髪に黄色い瞳とかこの人どこの人よ。と言うわけで、日本的な解決策はあまり通用しようもないで却下します。

と言うわけで……

「サヨナラー！」

「待て!!」

瞬時に回れ右をし、今までの人生の中で最も必死なスタートダッシュをしたと言うのに、ソイツはいとも簡単に私の腕を掴んで止め

てしましました。

見かけヒヨコつひいのに何この素早ち。……。

「申し訳ありませんが私宗教にはあまり興味は……」

「宗教の勧誘ではない」

「…………ドシキリ?」

「悪戯でもない」

「髪の毛? または紙……」

「言い間違えまた聞き間違えでもない」

「…………つまり?」

「私は神だ」

「ああ……色々な意味で別次元な人が……」

「おいらなんだその残念なモノを見る目は」

「…………なんでもないですよー…………?」

「目が虚ろになつてるかもしれないですが、そりは『』容赦ください。色々と手一杯なのです。

「まあいい。お前木崎家だな?」

「はあまあ木崎家ですが」

本来であれば知らない人、……それも自分を神様だとか言っちゃうよつた人に自分の名前を教えるのはご法度なんですが、……まあ犯罪なんてほとんどない良く言えばのどかな田舎村ではそんな防犯意識、毛ぼども育つてないんですね……

「うむ、やはりそうか。お前は木崎家にしてはあまり頭の中が空っぽではないようだが、木崎家特有のオーラだったからな」

……何か酷い侮辱を受けた気がする。ijiは怒るべきところなんでしょうけど、悲しいかな。じ近所でも木崎家はお頭が足りない、だけどまあ良い人だよねという風に捉えられます……。

「本当はお前の兄と姉を連れて行こうと思つてたんだが先を越されたからなあ。まあじつせ暇つぶしだしお前でいいか」

今色々と不穏な言葉を聞いた気がします。とりあえず言いたい事は……あの(・・)姉と兄の代わりってじつじつ意味だコラ。

「まあとつあえずはちやぢやつと連れて行つておくか。おいお前田をつぶつとけ。酔つべ」

「は？ 酔つそつて……？」

次の瞬間、私は忠告通り田をつぶらなかつた事を深く後悔しました。と言つた、忠告してから次の行動が早すぎるんだよ！ 猶予を「えりよーー」

* * * * *

はい、と言つわけでやつて来ました異世界です。

異世界に到着した私がまずしたのは感動でも困惑でも呆然でもあります。嘔吐です。

ぶちまけましたよ盛大に。

だつてありえないでしょう！　まったく心の準備もなくジエットコースターの何倍もあるあの胃の中を滅茶苦茶にする違和感！　圧倒的違和感！　しかもそれが一瞬だつたから気絶できなかつたつて言つのがさらにタチが悪い！！

とりあえず悪態の代わりにモザイクを入れなきゃいけない物を吐き出してから、私はしばらく草が生い茂る地面でダウンしてました。

「おい、まだ具合は良くならないのか？」

「ひつなつた元凶が何やら不遜な態度で言つています。勿論私はそれを無視します。

「正式な手順を踏まずに強引に召喚したからな……少し負荷がかかりすぎたか」

ちゃんとした召喚方法があつたようですが、後でコイツに叩きつける罵倒がもう一つ追加されました。

「今のうちに能力付与でもしておくれか」

自称神様はそう言つと、寝転がつて半眼でいる私に近づき、手を私の額にそえ何やら囁きました。

すると、私の体が光に包まれ、何やら体の奥底に小さな炎が灯つたような気がしました。ふんわりとした光はとっても癒し効果がありそうに見えましたが、私の気分は一向に良くなりません。与える

事よりこの気持ち悪さを取り除いて欲しいのですが。

「よし、こんなものだな」

なにがこんなものなのでしょう。どうか、そんな不思議怪奇能力をお持ちなら、私の具合をさつさと治してください。

「おい、今お前が話せるような状態じゃないのを見越して説明するぞ。私が今したのは能力付与……お前の世界の小説風に言つとトリップ特典か？ まあある能力を与えた。で、この能力なんだが……」

男はそこでじろえきれないという様に「へりへりく」と意地悪く笑った。

なんだか嫌な予感がします。自称神様発言をいたいた時の数倍嫌な予感がします。

「精神的に常人とは一線を画した人間……俗に言う変人やら変態やらに好かれる能力だ」

おいこらちよつと放課後体育館裏来いお前。

ハッ！あまりの衝撃は一昔前の不良中学生みたいな口調が出てしまいました。お恥ずかしい。

自称神様が

私を異世界に連れてきて

変態に好かれるスキルをくださつた

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

意味分からん。

「そ……それはどういった……理由で？」

息も絶え絶えに吐き気を抑えつつ私は自称神様に聞きました。その姿はきっと他人には涙ぐましい姿に見えたでしょう。むしろ私が泣きたい。

「ん？　ああ、暇だから」

「ああ？」

怒りに我を忘れてる。静めなきや。自分を。
この人は今なんと仰いました？　暇だから？　はいもう一度。

ひまだから

喧嘩売つとんのか「ラ。買うぞ？　買つちやうぞ？　一山100円だらうが一つ1万円だらうが関係なしで買つちやいますよ？」

「……暇だからって、どういう意味でしちゃうねえ？」

私の中にある日本人の精神、真髓である平和的解決策を願う心『とりあえず話を聞きましょう』を精一杯かき集めてきました。

「いやだから、最近あんまりにも暇だから、神仲間の中で流行つて木崎家召喚をしてみようと思つて。で、とりあえず呼んだら何かしら能力付与しないと異世界人つて世界に定着しないで戻つてしまふから、それなら見てて面白い能力がいいなあって事で変態に好かれる能力をだな」

「どうあえず殴らしてくれ。話はそれからだ」

とりあえず話を聞いたら、もつと平和から遠ざかりました。残念です。

＊＊＊＊＊

「どうやら私は」この自分から見て異世界である所の神様から、異世界特典と書いた名の『ゴミ』を押し付けられてしまったようです。

楽しむついでにやがつました。

政治小説の歴史

そして、私はその後どうなつたかと言つと

「変態の腕の中で頬ずりされちます。もつ鳥肌も立ちません。心にあるのは諦観のみです。

「」のド変態、言動はすべて気持ち悪いくせに見掛けだけはいやにキラキラしています。なんという残念なイケメン。

「私のかんわいいいいいいミツから離れる肩野朗！」

目の前で美しい顔を憤怒に歪めているのは同じくらい気持ち悪い変態です。女性なのに何故私の足に頬ずりする。いや男性も駄目だけど。なんという残念な美人。

「お前らやろそろいい加減にしろよ。ミヅが嫌がってるだろ。ほらミヅこっち来いよ。今日は新しい縛り方を編み出してきたんだ」

「遠慮します」

横で酒をラップ飲みしている筋肉隆々で精悍な顔立ちのナイスマドルは、右手に酒を持ち、左手に使い込まれた縄と鞭を持っています。そのニヤニヤ顔すら野生的と言えるのだから恐ろしい。なんという残念なオッサン。

今日も今日とて、神様から押し付けられたいらんトリップ特典のおかげで、私は元の世界を懐かしむ暇すらないほど色々忙しいです。神様がくださつた変態に好かれる能力はそれはもう絶大な威力を発揮しました。しかもいらん所で高性能なのか、この能力、元は表面上変態ではなかつた人間ですら、奥底にある変態性を呼び起こすという恐ろしい代物でした。

これのおかげで、理想の王子様と名高いこの国の第一王子が、今や少女に頬ずりするのが生き甲斐のド変態と化し。

社交界で高嶺の花と言われた高潔かつ麗しい大貴族のお姫様が、今や少女の太ももに涎を垂らさんばかりのド変態と化し。

傭兵の世界だけに留まらず世界各国の上層部で知らぬ者はいないとまで言われた伝説の傭兵が、今や少女の体を美しくかつ淫靡に縛り上げる事に情熱を注ぐド変態と化すとは……
どんだけ強力だつちゅうねん！！

私の【変態ホイホイ】は【生命体Gホイホイ】よりずっと高性能です……だつてもう3匹もつかまえました……私の意志とは関係なく。

ああ、最初に出会つた頃が懐かしい……あの頃はまだこの【変態ホイホイ】の毒牙にかかる前だつた彼ら……あの頃は瞳に理性の火が灯り、いきなり現れた私を胡散臭い物を見る目で見ておりました。そう、あれこそが正しい姿だったのです。

それなのに……
それなのに……！

「どうしてこうなった……」

精神的に疲れつつ色々諦めていた私はこの時知りませんでした。
私のこの能力により変態に目覚めた人達は多く、その中には私に危
害を加えようとする輩もいて、だけどそんな輩は皆第一王子や大貴
族のお姫様や伝説の傭兵やらに接触する前に叩き潰されてたとか。
知らぬ内に私は有害な変態から守られていたとか。

精神的にはあれだけ肉体的には彼らはまったく無害な変態であ
るとか。

まったく、全然、欠片も思いもしませんでした。

【変態ホイホイ】完

(後書き)

「これでも光ちゃんは木崎家の中では常識的な方なのです。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6648v/>

変態ホイホイ

2011年8月10日13時14分発行